

# 平成 30 年度調査研究報告書

障害者スポーツの普及に求められる認知度向上と  
誰もが楽しめる環境作りの重要性に関する研究

長野大学 社会福祉学部 伊藤専門ゼミナール

F16042 京嶋みなみ

F16108 西澤 藍璃

F16110 西澤 咲良

指導：伊藤英一教授

## 目次

1. はじめに	1
2. パラリンピックの概要	1
3. 方法	
3-1 ボッチャ	2～5
～歴史・ルール・考察～	
3-2 シッティングバレーボール	5～6
～歴史・ルール・考察～	
3-3 ブラインドサッカー	7～8
～歴史・ルール・考察～	
4. まとめ	8
5. 参考文献	8～9

## 1. はじめに

2020年に東京オリンピック、パラリンピックが開催される。これまでのオリンピックやパラリンピックにおいて、例えばTV報道を見ても、オリンピックは総合テレビと民間放送で扱っているが、パラリンピックは総合テレビしか扱っていない。<sup>1)</sup>テレビ局側も視聴率が取れないから、放映権料を出してまで放送をする局がないため、視聴率や認知度も低い。そもそも障害者スポーツに関心がない人が多いとの調査結果もある。私達自身も障害者スポーツについての知識は多くなく、スポーツへの苦手意識を持つ者も少なくない。スポーツという硬いイメージを変え、障害の有無に関係なく誰もが共に楽しめるようなスポーツがあれば、それは生涯スポーツにも繋がるのではないと考え、自分たちが楽しめて気軽に体験できれば生涯スポーツにも位置付けられるのではないかと考えた。

身障者スポーツは、<sup>2)</sup>“第一に身障者自身が、まず身体を鍛えることにより残存能力の強化を図り、また合併症の予防をし、体力機能に自信を持たせ、明るい希望と勇気を抱くようにすることである。第二には、一般社会に身障者の持つ能力を認識してもらい、理解と関心を深めることにより、身障者の社会復帰の一助とすることである。第三には、身障者がスポーツを通じて互いに交友を深め、励まし合って、一人一人の生活を向上させていくようにすることである。”とされている。身障者スポーツの意義は障害の有無関係なく、誰にでも共通して言えることであり、障害者・健常者がお互いに理解し合い共有することでスポーツというイメージが変わるのではないかと考え、身障者スポーツについて調査し体験したことをまとめる。

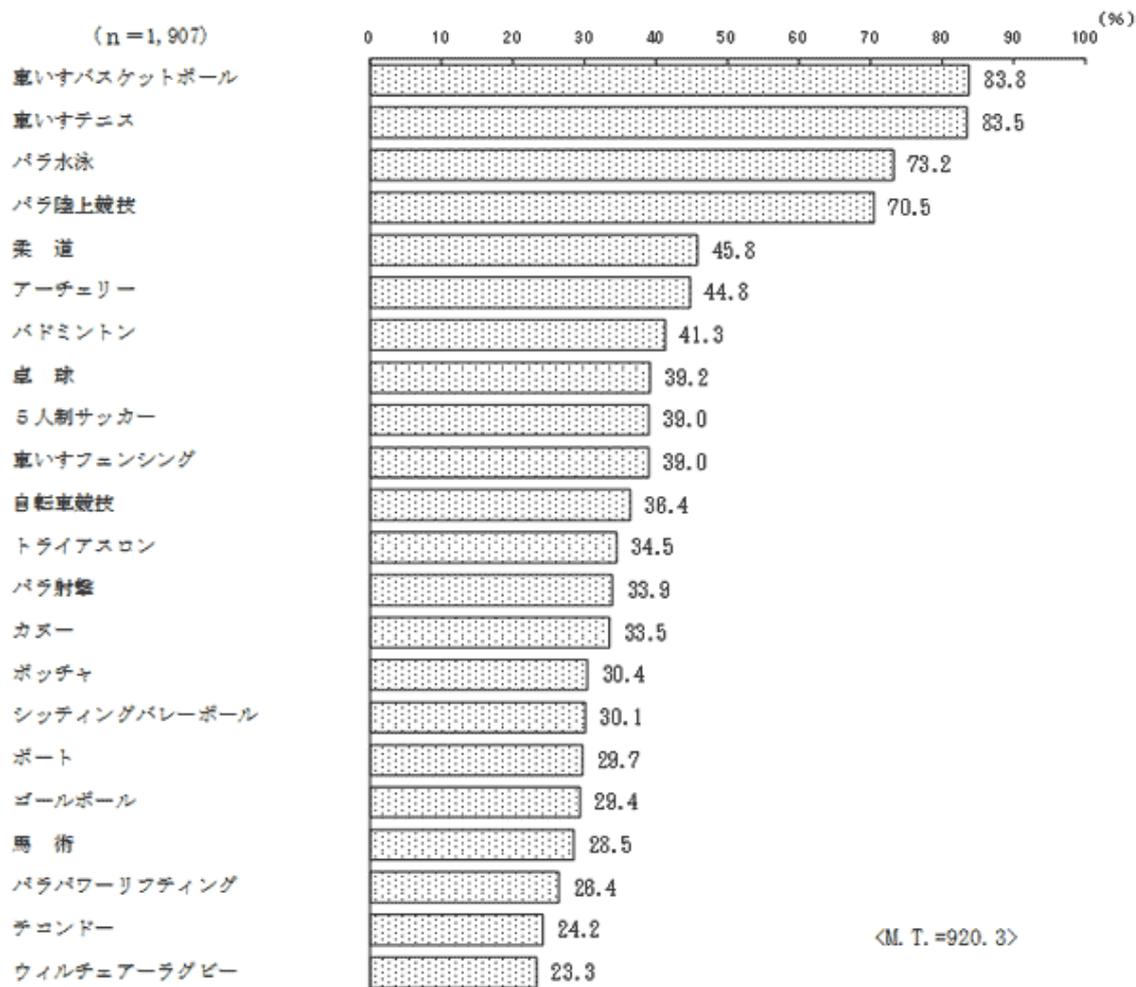
さらに、今後障害者スポーツが普及するためにはどんな取り組みが必要となっていくのかを、考え実践していく。まず考えられるのはパラリンピックのテレビ中継だ。また、子どもたちに多く知ってもらうためには、体育の授業で取り入れたり地域の活動などで障害者スポーツを体験できる機会を増やすことで普及につながるのではないかと考えた。

## 2. パラリンピックの概要

パラリンピックとは、障害のあるトップアスリートが出場できるスポーツの祭典である。<sup>2)</sup>パラリンピックの起源は1948年、第2次世界大戦で主に脊髄を損傷した兵士たちの、リハビリテーションの一環としてアーチェリーの大会が英国マンデビル病院において始められ、1952年に国際大会になった。1964年東京オリンピックの時、世界で初めてパラリンピックの名称により国際大会が開催された。1988年からはオリンピックの後に同じ会場で開催されるようになり出場者も「車いす使用者」から様々な身体障害にまで対象が広がった。Para（沿う、並行）+Olympic（オリンピック）という意味で「パラリンピック」という正

式名称も定められた。

2020年の東京パラリンピックでは22種目の競技がある。種目としては、アーチェリー、陸上競技、バドミントン、ボッチャ、カヌー、自転車、馬術、5人制サッカー、ゴールボール、柔道、パワーリフティング、ボート、射撃、シッティングバレーボール、水泳、卓球、テコンドー、トライアスロン、車いすバスケットボール、車いすフェンシング、ウィルチェアーラグビー、車いすテニスがある。認知度について以下のことが分かっている。



[http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/01/30/01\\_02.html](http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/01/30/01_02.html) より

私たちはその中から、ボッチャ、5人制サッカー、シッティングバレーボールの3競技に絞り、実際に体験してみた。

### 3. 方法

#### 3-1. ボッチャ

ボッチャとは、パラリンピックの正式種目であり、古代ギリシャの球投げを起源として6世紀のイタリアで競技としての原型が考案され、20世紀に入って重い障がいのある人も参加できる形に整備され普及<sup>3)</sup>した。重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障害者のために考案されたスポーツであり、ニューヨーク1984大会から競技となった。

ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ6球ずつボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりしていかに近づけるかを競うものである。

障害によりボールを投げる事が出来ない場合でも、勾配具（ランプ）を使い、自分の意志を介助者に伝えることができれば参加することができる。競技は男女の区別なく、クラスに分かれて行われ個人戦と団体戦（2対2のペア戦と3対3のチーム戦）がある。障がいの程度によりクラスが分かれており、同じクラスの選手同士が対戦する。クラスはBC1、BC2、BC4、オープンの5つでオープン以外の4クラスがパラリンピック等の国際大会対象クラスである。

・クラス分け：BC1～BC4の4クラスがパラリンピック等の国際大会対象クラス<sup>4)</sup>

	対象	投球	勾配具	アシスタント	備考
BC1	脳原性疾患	可（足蹴り可）	×	○	アシスタントに車椅子の操作、ボールを渡してもらうなどのサポートをしてもらえる
BC2	脳原性疾患	可	×	×	上肢での車椅子操作がある程度可能
BC3	脳原性疾患 非脳原性疾患	不可	○	○	自身での投球ができないため、アシスタントによるサポートにてランプ（勾配具）を使用する
BC4	非脳原性疾患	可（足蹴り可）	×	△（足蹴り選手のみ可）	BC1・BC2と同等の四肢運動機能障害を有する（頸髄損傷、筋ジストロフィーなど）

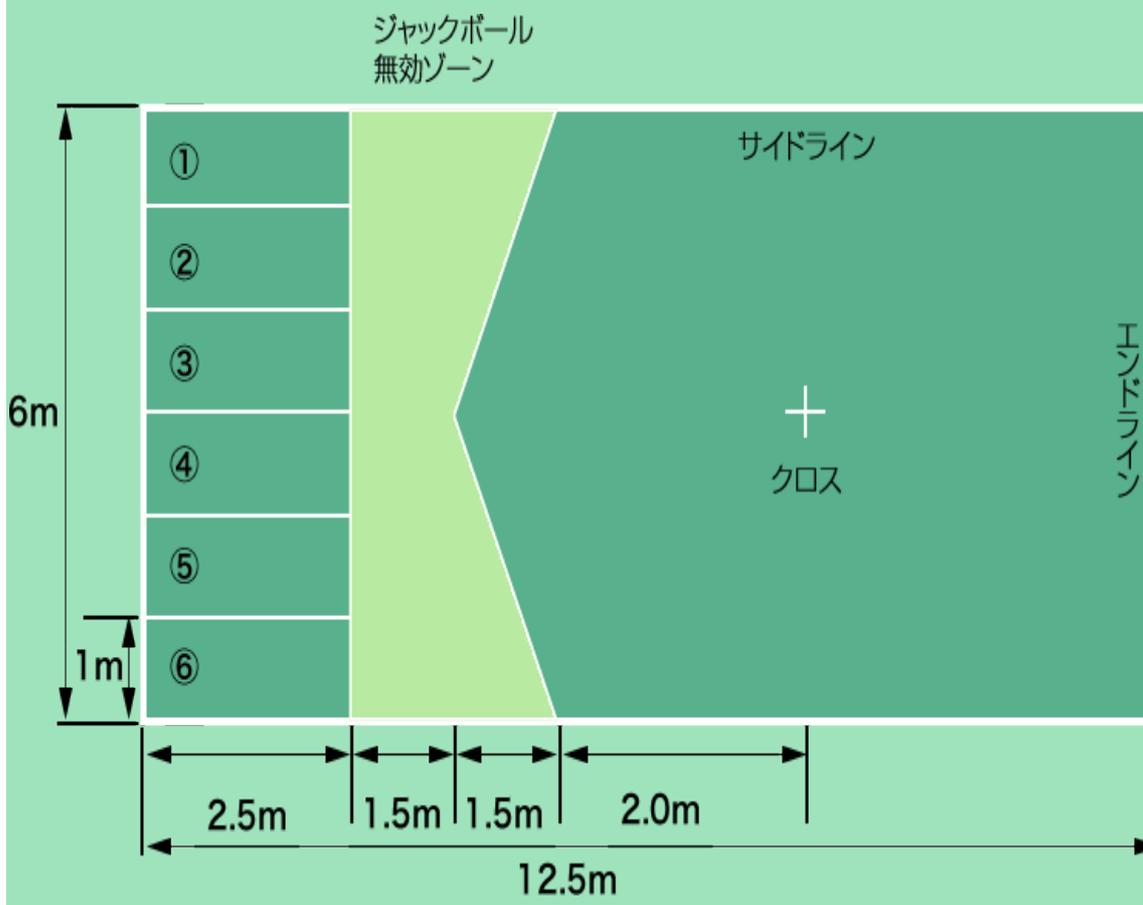
・オープンクラス：日本独自

オープン座位	BC1～BC4 に該当せず、座って投球する選手、車椅子使用の有無は問わない
オープン立位	オープンクラスの中でも、立って投球が可能な選手、片麻痺や下肢の骨関節疾患など

・コート

競技は、12.5m×6m のコートで行われます。

選手は 2.5m×1m のスローイングボックス内でプレーをします。個人戦ではボックス③④(③が赤、④が青)、ペア戦ではボックス②～⑤(②④が赤、③⑤が青)、チーム戦ではボックス①～⑥(①③⑤が赤、②④⑥が青)を使用します。



※日本ボッチャ協会の資料より

・考察

大学祭のゼミ企画として実際にボッチャを行ってみた結果、立位での投球よりも車いすでの投球のほうが安定して投げられ、やりやすいという声が多かった。また、転がして行うよりも下から上へ「ポトン」と落とすように投げたほうがボールの転がり過ぎを防げる

ということがわかった。

身体障害者だけでなく知的障害をもつ人でも、適切なサポートを行えばボッチャに参加できることがわかった。実際に訪れた14歳の知的障害を持つ少女もアシスタントが付き添い、指差しと声掛けをすることでボッチャに参加できたのだ。このように、健常者はもちろんのこと身体や知的に障害を持つ者でもボッチャは多くの人が行うことができるのだ。しかし、目で見てボールの色や場所を把握するボッチャでは、視覚に障害を持つ人には厳しいのではという考えがでてきた。調べた結果、<sup>5)</sup>取り組みとして「サイバーボッチャ」×「AI」で視覚障害者のプレイをサポートという、テクノロジーでパラスポーツの普及を図っている企業が存在することがわかった。(株)ワントゥーテンが発表した「サイバーボッチャ」はボールの位置と色をセンシングで計測し、ポイントをコートに映し出す事ができ、コートサイズや立て付け方法などのカスタマイズも可能とされている。それに加え、AI技術を活用したり、ゲームの状況を会話を伝えるアナウンス機能とボールの投げ方を会話でサポートするヘルパー機能をつけたりなど、視覚障害のある人もプレイが可能となったのだ。これは2020年の東京パラリンピックでも活用されるため、障害の壁を超えた誰もが楽しめるものとなると考える。ボッチャに限らず、様々なスポーツが色々な工夫により障害者も健常者も共に楽しめるようなものが今後より多く出てくると良いと考える。

### 3-2. シットイングバレーボール

シットイングバレーボールは、臀部の一部が常に接触したまま行うバレーボールだ。

<sup>6)</sup>サーブ・ブロック・アタックなどで立ち上がったたり、飛び跳ねたりすると反則になる。

ここで、「臀部」とは「上体」のことであり、肩から臀部までの部位をいう。

#### ・歴史

シットイングバレーボールの始まり<sup>7)</sup>

1956年に戦争によって体が不自由になってしまった人々によりオランダで考案された。

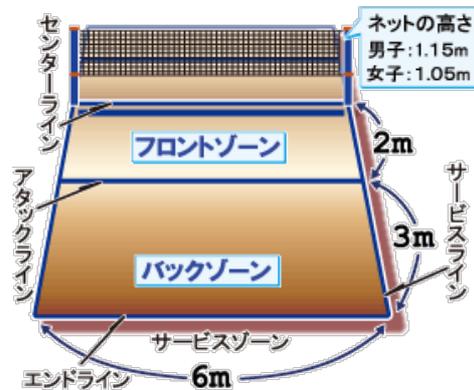
リハビリテーションのためにスポーツが導入された。一般に関心を集めるようになったのは、1957年に大会を開催したことが影響している。

#### ・シットイングバレーボールの特別ルール

競技者の位置・スパイク・ブロック・レシーブに分かれている。

位置は、臀部の位置によって決定されている。スパイクは、臀部をコートから浮かしてはならないのである。ブロックは、前衛の人が相手チームのサーブをブロックすることが出来る。ブロックを行う時、競技者はコートから臀部を持ち上げることはできないのだ。レシーブは、短時間であれば臀部の離床は許されている。立ち上がりや歩くことは禁止されている。

・コート



一般社団法人日本パラバレーボール協会より



<https://www.parasapo.tokyo/sports/sitting-volleyball> より

・考察

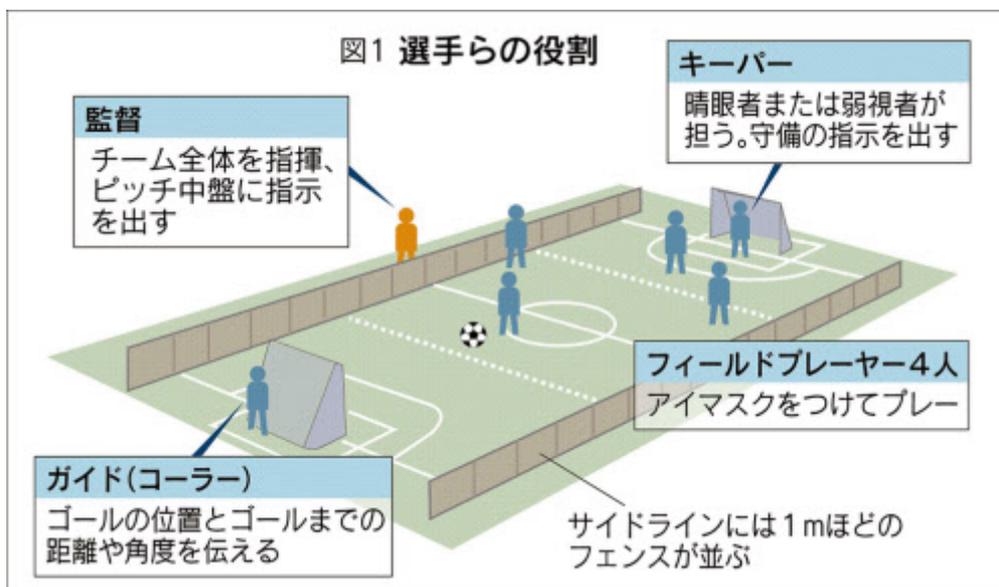
実際やってみて、バレーボールでは、足を使ってボールを上げて構わないが、シッティングバレーボールでは、臀部を浮かせることが出来ないのですべて手で拾うのが基本なのでとても大変だった。また、バレーボールのルール 8)では、相手のサーブをブロックするのは禁止になっている。ですが、シッティングバレーボールは、サーブもブロックしてもいいのですぐに決まってしまうこともある。また、三回で返すことが出来ず面白くないということもあった。他にも、スパイクもバレーボールより難しく背筋をバレーボールより使わないとシッティングバレーボールでは苦しいと感じた。障害がある有無関係なく出来ることはとても楽しいし、交流の幅も広がっていくと考える。

### 3-3. ブラインドサッカー（5人制サッカー）

ブラインドサッカーとは、視覚障害の方が行うサッカーである。

#### ・歴史

視覚障害者によるサッカーは、1980年の初めに開発され、ヨーロッパや南米を中心に広まった。ルールは1チーム5人で、コートサイズはフットサルと同じである。両サイドのラインに高さ1メートルほどのフェンスが並ぶ。ボールは転がるとシャカシャカと音が鳴るボールを使用する。時間は前半後半各20分である。アイマスクを付けた選手が4人ピッチを走り、ゴールキーパーは視覚に障害のない選手または弱視の選手が務める。監督、コーラーが声で選手にボールや相手選手の位置、状況などを伝える。ボールを持った相手に向かっていくときは、「ポイ！」と声をかけて向かっていく。（この声を出さないとファウルになる）。



<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ091168140R30C15A8000000/>

#### ・考察

実際にブラインドサッカーを体験してみて、サッカーと違うと思ったことはどこの感覚を使うかだ。私はサッカーをするときは、目からの情報を頼りにしている。しかし、ブラインドサッカーは目からの情報が何もないため、ボールの転がったときに鳴る音や、コーラーの声などの耳からの情報を頼りにしなければならない。サッカー会場でよく耳にする声援はブラインドサッカーでは選手にとって妨害になると感じた。また、ボールを蹴っても自分の思っていた方向にいったのか、自分の目で確認ができないので自分の思い通りには動けなかったり、下手に動いて相手選手とぶつかる可能性もあったりするので、耳から

の情報が重要だと感じた。

ブラインドサッカーは、視覚障害の方だけではなく、耳が聞こえればアイマスクを着用することで誰でも楽しむことができるスポーツだと感じた一方、アイマスクをした状態で走ったりボールを蹴ることに慣れたりするまで時間がかかるので、すぐにプレーをするのは難しいと感じたが、サッカーが好きな人でも、苦手な人でも誰でも楽しめる競技だと思った。

#### 4. まとめ

障害者スポーツの認知度を調査した結果、オリンピックは総合テレビと民間放送が扱っているが、パラリンピックは総合テレビしか扱っていないことが分かった。また、視聴率や認知度も低いことから、障害者スポーツが注目されにくくなっていることも分かった。

そこで今回は、シッティングバレーボール・ブラインドサッカー・ボッチャの3つに絞り障害者スポーツを体験してみた。どの種目に置いても、条件を同じにすることで障害を持つ方と共に参加できるのだと感じた。特にボッチャに関しては様々な障害を持つ方も参加できるような工夫が多くあり、誰もが楽しめるものになっているのだ。ただ、ボッチャはボールを投げるだけだが、ルールが細かいため、運動が苦手な方や高齢者などの、普段運動をしない人にも楽しめるスポーツであると考えた。ブラインドサッカーは、小学生を対象とした場合、けがや事故が起きてしまう危険性があるために、ある程度危険を察知できる中学生や高校生から体験したほうが楽しめると感じた。シッティングバレーボールは、座って行う競技だが、体の動作が激しいので、小学生から大人まで幅広い世代から楽しめるだろう。まだまだ、障害スポーツを行える機会というのは少なく認知も低い、障害者スポーツだからといって障害者だけが参加するのではなく、障害の有無関係なく誰もが気軽に参加できるような場があると良いと思った。自分にできるスポーツを見つけることで生涯スポーツに繋がる可能性ができ、さらに新たな出会いの場としても人との繋がりという面でとても良いきっかけとなると考えられる。

#### 5. <引用・参考文献>

- 1) パラリンピックがテレビ放送されない理由！視聴者の需要の低さ？ | トレパラ！  
<https://torepara.com/paralympics-namahousou-moriagarairiyuu/>
- 2) (障害者スポーツ 監修：日本リハビリテーション医学会 編集：日本リハビリテーション医学会 編集： 3 日本リハビリテーション医学会スポーツ委員会 369. 27 N77)
- 3) パラリンピック競技：ボッチャ | 東京オリンピック・パラリンピック競技大会  
<https://tokyo2020.org/jp/games/sport/paralympic/boccia/>
- 4) ボッチャについて | 日本ボッチャ協会 <http://japan-boccia.net/about/>

- 5) 「サイバーボッチャ」×「AI」で視覚障害者のプレイをサポート  
<http://heart-design.jp/report/180630cyberboccia/>
- 6) シッティングバレーボール | JPVA 日本パラパレーボール協会  
[http://www.jsva.info/contents/spoting\\_events/sitting.html](http://www.jsva.info/contents/spoting_events/sitting.html)
- 7) シッティングバレーボールとは？ルールを知ってパラリンピック競技を楽しもう！  
[https://shohgaisha.com/news/sitting\\_volleyball/](https://shohgaisha.com/news/sitting_volleyball/)
- 8) シッティングバレーボール-パラリンピックサポートセンター  
<https://www.para-sports.tokyo/topics/column/paratomo/program1-2/>
- 9) 東京都オリンピック・パラリンピック準備局  
[https://www.2020games.metro.tokyo.jp/taikaijyunbi/taikai/syumoku/games-paralympic/p\\_football/index.html](https://www.2020games.metro.tokyo.jp/taikaijyunbi/taikai/syumoku/games-paralympic/p_football/index.html)

長野大学社会福祉学部  
伊藤専門ゼミナール報告書  
平成31年3月発行

本件に関する問い合わせ先：  
長野大学社会福祉学部社会福祉学科  
伊藤英一（教授）  
<http://www2.nagano.ac.jp/ito/>  
長野県上田市下之郷 658-1